

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

氏 名： IMADE Richard Eke

論 文 題 目

Work Quality in Nigeria's Formal Wage Employment, "Voluntary" Exit and Well-being in Informal Self-employment

(ナイジェリアにおける正規雇用の労働の質と『自主』退職および非正規自営業者のウェルビーイング)

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	伊東 早苗
委員	名古屋大学	教授	東村 岳史
委員	名古屋大学	准教授	クリスチャン・オチア

論文審査の結果の要旨

1. 論文の概要と構成

本博士論文は、フォーマルセクターで正規雇用されている労働者が自発的に退職し、インフォーマルセクターにおける非正規自営業に転職する事象について、ナイジェリアを事例として分析するものである。従来、フォーマルセクターにおける正規雇用こそが職の安定を保障するものとみられていた途上国において、自ら安定をなげうって、リスクの高いインフォーマルセクターの非正規自営業に転ずる行為は滅多に起こらない事象とされ、研究対象として注目されてこなかった。本研究はこの意外性に着目し、なぜこうした事象が起こっているのかを、ナイジェリアの都市の文脈において、質的および量的データ分析を組み合わせて実証的に解明するものである。結論として、フォーマルセクターの正規労働であっても労働の質が高いとは限らず、給与の未払いや遅延、長時間労働等が労働者の不満につながっていること、インフォーマルセクターではあっても自営業に転ずることにより、収入面だけでなく、生活の質が向上し、ウェルビーイングが高まると認識されている、と議論する。また、ジェンダーによる差異に注目し、女性は男性に比べて、家事や育児等の事由でインフォーマルセクターの非営利自営業に転ずる場合が多く、転職によって、男性ほどには収入の向上やウェルビーイングの改善にはつながっていないと論じる。なお、本論文におけるフォーマルセクター、インフォーマルセクターの区別は、政府や地方自治体への事業登録の有無に関わらず、雇用に紐づけられる社会保障サービス（年金、健康保険等）へのアクセスがあるかないかが基準となっている。

本論文は全8章からなる。第1章は研究課題およびその背景や意義を説明し、本論文の構成を説明する章である。第2章は、労働の質、自発的・非自発的転職、労働とウェルビーイングに関する先行研究を整理し、本論文の中心的アプローチであるケイパビリティ・アプローチについて、概念整理を行う。その結果、労働の質は、収入や社会保障制度を利用する権利には限定されない、人間の潜在能力や機能の拡張がなされる程度によって測られるべきであると議論する。第3章は、本研究の事例となるナイジェリアのマクロ経済や経済政策の概況、政治状況、社会保障制度の概略を説明し、労働者が労働の質を体験し、認知するための外的環境を明らかにする。また、ナイジェリアの社会構造を、ジェンダー関係を軸にして分析する。第4章は、本研究が依拠するケイパビリティ・アプローチについて研究内容に即して具体的に詳述し、質的、量的データ収集および分析の手法と、その組み合わせによる分析の流れを説明する。第5章は、調査対象者の社会経済的特徴を分析し、彼らがナイジェリアのフォーマルセクター正規雇用を労働の質という観点からどのように認識しているかを分析する。第6章は、重回帰分析を用いて、フォーマルセクター正規雇用からインフォーマルセクターの非正規自営業に転じた調査対象者たちの収入が増加傾向にあることの要因を特定するとともに、インタビュー・データの質的分析により、彼らがウェルビーイングの変化をどのようにとらえているかを、ナイジェリアのマクロ経済状況と合わせて比較分析する章である。結論として、労働者は収入面以外の生活の質を考慮し、フォーマルセクターからインフォーマルセクターに自発的に移動し得る

論文審査の結果の要旨

と議論する。また、この自発的な移動の成功要因として、教育レベルや移行期の副業経験、さらにナイジェリアのマクロ経済の動向をあげている。第7章は、前章の内容に、ジェンダーの視点から新たな分析を加える章である。女性たちも男性たちと同じく、自ら選択してインフォーマルセクターにおける非正規自営業への転職を図り、その結果、ワークライフバランスが向上してはいるが、彼女たちのウェルビーイングは男性ほどには向上していないことをデータを通じて明らかにする。その理由として、彼女たちの転職の動機が、みずからのウェルビーイングよりは家庭の事情に依拠する傾向にあると議論する。第8章は、本博士論文の中心的議論を総括しながら、先行研究と照らした独自の貢献を明らかにし、政策への含意を議論する章である。

本研究の第6章で論じられる内容は、1本の査読付き学術論文として刊行されている。

2. 評価

本研究はナイジェリアの雇用問題を分析する研究として、以下の点が評価に値する。

- 1) 途上国の雇用問題を扱う従来の研究において、一般的には、不安定なインフォーマルセクターの非正規雇用は望ましくないとみなされ、いかに多くの労働者をフォーマルセクターの安定した雇用に導くかという政策的議論が主流であった。本研究は、ナイジェリアの都市を中心に近年起きている雇用動向の変化に着目し、フォーマルセクターとインフォーマルセクターの関係に関するステレオタイプが必ずしも当てはまらないこと、途上国といえども、収入面だけではなく、非収入面でのウェルビーイングに価値を置く都市労働者が存在することを、定量・定質両方の実証的データ分析を用いて示した。これらの議論は、途上国の雇用に関する国際開発分野の政策論議にありがちな一般的前提に疑問を投げかけるものであり、独自の貢献が認められる。
- 2) 本研究は、上記の議論を展開するにあたり、ジェンダーの視点を研究課題の設定の段階から有効に組み込んでいる。1990年代以降、すべての開発課題の研究にジェンダー分析を組み込むという「ジェンダー主流化」が唱えられてきたものの、実際には、ジェンダーの視点に特段の配慮がない研究や、女性に限定した内容の章や節を附属的につけ足すだけの研究がいまだに多い。本研究は、フォーマルセクターからインフォーマルセクターへの労働者の自発的な移動という一般的分析課題の中に、ジェンダー分析を効果的に統合しており、ジェンダー主流化を追求する国際開発学分野の研究として、模範的なアプローチをとっている。

同時に、本研究は以下のような不十分な点も含んでいる。

論文審査の結果の要旨

1) 本研究は重回帰分析とインタビュー調査を組み合わせた実証的な研究であるが、定量・定質両面を組み合わせた分析手法は難易度が高く、両者のバランスを適切に保つためには高い技術を要する。本研究は、リソースの制約上、比較的少ないサンプル数(約 200 名)による調査設計となっており、統計分析だけの精度を考えると、限定的であるといわざるを得ない。一方で、質的分析の精度を高めるために重要な社会的コンテキストの把握と描写もまた限定的なものにとどまっている。定量・定質それぞれの分析手法を組み合わせることで足りない部分を補完しあっていると見えるが、それぞれの分析手法を個別でみた場合には、さらなる改善の余地がある。

2) 著者は文章力が高く、ひとつひとつの文章は論理的で美しく構成されている。その一方で、論文全体で見ると、同じ内容の重複や、比較的重要度の低い事象への長文にわたる説明があり、読み手の負担を不要に増やしている部分がある。より簡潔かつ明快に論旨を伝えることのできる執筆方法を身に着けることで、将来的に多くの読者をひきつける学問業績を積むことができると思われる。

しかし、これらの点は、論文著者が今後の研究において取り組むべき将来の課題であり、本論文の価値や独自性を損ねるものではない。本論文は、博士論文としての水準に足りるオリジナリティと学術的価値を十分に有していると判断する。

3. 判定

以上のような審査の結果を基に、本論文は博士(国際開発学)の学位に値するものと判定する。